

プアップする方法では、揚水高は少くとも15-mを要して苦しく、しかも近年来、農家の井戸の水位が下降気味なので、段丘面に新たに井戸を増やすこと自体が困難と思われる。

ここで何人かの関係者による探水方法の見解を比べてみよう。まず事業の推進責任者Mさんは——専門家の意見を質しながら経費との相談で苦しみつつ、水を出したい、出なければならぬのだと常に情熱的に心に期している。同じ事業の若手担当者でこの施設の直接管理者F君は——やはり専門知識は持たないが強い実行力で調査機器を駆使し、最終的に丘陵内の小沢から水を引くという一応の結論を考えていた。次に段丘面の部落の農夫の1人は——山(丘陵)の裾で井戸を掘れば水は出る、という。一方施設の区域に隣接する水田の所有者は——丘陵から流れ出る沢の出口にもと水田用水の溜池があるが、その土どめの築堤から滲み出る水が案外豊富だからこれを集めて引けばよいとの説。(山裾で井戸を掘るにはこの人の農地を借りなければならない。)次に井戸掘り屋の話——丘陵でも水は出る、現に施設区域内で最近古井戸が発見され、水も溜っていた位だから掘ってみるとよい(この古井戸の水は地表のしぼり水で、恒常的な地下水でないことがボーリングでわかった。)その後留萌から頼んだユンボ掘り(ショベルカー運転者)は——丘陵内の3本の小沢の出口を掘り上げたが湧水はないと、意見も出さない。次に地質・土壌の専門家のはしくれ(つまり筆者)——丘陵内の最大集水面積をもつ沢(但し区域内で最も速いはずれにある)の開口部に小規模の堰堤を作り、導水パイプを引く、凍結期の水量を測定した上で次の春に工事をする。井戸は断念。最後に陸水学者の1人(筆者の知人)は——このような所では水は得られないのが常識、小平薬川から導水するか深井戸を掘るかだが、水利権の問題がからむ。

さて現在は、暫定的に近い小沢から引水しポンプアップを併用して、7~8人が生活できる状態になった。厳寒期に渇水しないか、今後20人程度の生活を支えるにはどの方法をとるべきかが懸案となっている。

晩秋の松代

式 正 英

昨年の10月から、私自身の身边がにわか革(あらた)まった。思いがけないことだったが、文教育学部長の重責を負わされることになったからである。勤め始めてから19年目の馴れた大学だから、大した変哲も感じないで済むと思ったのは大ちがいだ。部屋のたゞずまいが変り、事務官達との付き合いが、多くなったばかりではない。中味のまるで異った仕事に追いまくられて、教育、研究が主な仕事だった在来のペースは全く乱されることになった。未だにこの勝手の異った環境とは調和させようにも出来ない思いである。

併しこの様な具合の中で、何とか気分転換の方法を見付けたきっかけは、信州松代への旅行だった。月の変る期間の数日だけが、少しまとまって暇になるチャンスなのである。半年ほど前に気象庁の火山学者の諏訪彰さんが、松代の地震観測所の所長に転任され、「一度来て見ないか」と誘われていたのを思い出して、大学院生ら5人と一緒に訪ねてみることにした。真田氏の城下町だった松代は、駅

の乗降客もまばらな田舎の街の風情であった。街の周辺には、黄色い葉っぱに色づいた長芋の畑が、可成りの面積にわたってとり囲んでいるのが、目立った風景である。

地震観測所は、13年ほど前の松代群発地震の時にも名を馳せたが、戦争末期に大本營の移転先として掘削された地下壕を利用したものとしても有名である。見物に訪ずれる人は多いが、100mの長さの石英管ひずみ計の設置してある大坑道に入ることは普通では許されない。所長の特別のはからいで、総延長2km位もある大坑道の奥深くまで見学することが出来て、大いに満足を覚えた。小坑道の出口に隣接する外側には細長く部厚い陸(オカ)屋根の平屋があり、天皇、皇后の安在所予定の部屋が残されている。更に皇族の子弟の学問所、つまり学習院になる筈だった校舎の建物まで準備されていたのには驚かされた。緑色のペンキの剥げかかったその木造の建物は、今は保育所に利用されていた。

松代の街まで戻って、街中にある象山(ぞうざん)記念館や象山神社を日の暮れるまで訪ね歩いてみた。あの幕末の蘭学者、佐久間象山は、こゝに生まれ育ち、仕官し幽閉もされた。象山は常に時代に先駆ける卓見を持ち、行動的な学者であったが、性狷介(けんかい)で人と調和できず、自信過剰がわざわざして、世に容れられることが少なかったことを知る人は多かろう。その博覧強記と篤学ぶりは、記念館に陳列されている数々の遺品で圧倒される程である。「和魂漢才」と云うよりは、「東洋の道徳、西洋の芸術」と標榜した当時の先進的儒学兼洋学者と云った方があてはまる。松代という小さな城下町が、当時の日本の第一級の思想家を生んだことは誠に興味深いことである。

学問や教育に理解を示し、学者を敬愛する信州の風土の特色は、松代に来てみると、象山の気迫のようなものが肌に感ぜられて、こゝに凝集しているように思えて来る。民宿「六文銭(真田家の家紋)」で明けた朝、山肌は紅葉に染まり、陽光は猫岳の山頂の雪を白銀に照らし、気分はまことに爽快だった。

(1979年1月15日)

アメリカの印象

井内昇

昨年の春休みを利用して、4週間足らずではあったが、14年ぶりにアメリカ各地を駆足で旅行してきた。

国務省が組んでくれた日程が盛沢山であったため、羽田に帰り着いた時は疲労の極に達していたが、最近のアメリカの変化を自分の眼で確かめ得た満足感は大きかった。短い旅行にも拘わらず期待以上の収穫が得られたのは、各地で接した官民さまさまの人々の好意のお蔭であるが、その中でも留学時代の恩師である、現ウィスコンシン大(ミルウォーキー)教授のメイヤー先生の暖い歓迎は忘れられないものである。

「アメリカに来たら必ず自分の家に泊るように」というお招きを事前に頂いていた手前、余り気が進まなかったが、(と云っては罰が当るが)、ご好意に甘えて春にはまだ遠いミルウォーキーを訪れたのは4月5日のことであった。ミルウォーキーでは、右手の不自由な教授が自ら車を運転して駅ま